九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アンドレ・シェニエの詩学について

永田，英一

https://doi.org/10.15017/2332735

出版情報：文學研究. 72, pp.231-248, 1975-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

アンドレ・シェニエの詩学について

永田英一

アンドレ・シェニエ[1]には、いわゆる『詩学』*l'Art poétique* ou *la Poétique* と銘打たれた作品はない。けれどもかれの死後、遺された諸種の未定稿の中に、われわれはシェニエの詩学、あるいは少なくともかれの文学理論ないし制作態度を知るための、かなり確かな手がかりを見出すことができる。というのは詩篇「創作」[2]「文学界」[3]、試論「文学の完成と退廃について」[4]その他若干の書簡詩などであるが、中でも三九二行からなる「創作」の一篇は、諸家も認めるように、もっとも〝詩学〟の名に値するもので、かの有名な詩句――シェニエの詩学の集約的表現とみなされる――〝新しい思想で古い詩文を作ろう〟[5]という一句もまたこの中に含まれている。――われわれの考察もまずこの詩篇に拠るであろう。

1) André-Marie Chénier――一七六二年コンスタンチノープル（イスタンブール）に生る。父はフランス人、母はギリシア的教養の深いラテン系。一七九四年恐怖政治の末期に処刑さる。一八一九年『全集』が公刊され、ロマン派の先駆として祭りあげられた。

2) Poème de *l'Invention.*

3) *République des Lettres.*

4) *Essai sur la perfection et la décadence des Lettres.*

5) "Sur des penseurs nouveaux faisons des vers antiques."

フランス文学史において、詩学、詩法といえば、古代ギリシア・ラテンの文学伝統と切離して考えることは到底できない。ボワローの『詩学*』は、周知のように、アリストテレスやホラティウスの『詩学』を継承するものであり、それ以前のものはもちろん、その後のものも詩学に類するものは、すべてギリシア・ラテンの古典的原理との関連において発想されているといってよい。この点、シェニエの場合もまた例外ではないが、かれにあっては特に自称〃半ギリシア人〃 *demi-Grec* として、またフランス十八世紀の子として、さらにその強烈な個性からして、一種独特の方法を考案していたことに注目しなければならない。

* *Boileau, L'Art poétique* (1674)

*

詩篇「創作」において、シェニエはまず Imitation (模倣) と対比して Invention (創意工夫) の必要性を強調する。——ウェルギリウスの「聖なる月桂樹」が永遠に色褪せないのは、詩人の「創作の足が道を拓き」その手が「芸術の殿堂の最初の円柱を建てた」からで、この先例は重大な教訓を与えている。ウェルギリウスに忠実になるために、われわれもまた「新しい円柱」を建てねばならない。「模倣の奴は生れて、消える」が、〃創作者にのみ生命は約束されている〃からだ。

けれども〃創作することは唐突に真実、良識、理性を傷つけることではない。〃魚類を空中に飛ばせたり、禿鷹

の翼で海水を切りひらかせたりするような、バカげた錯乱は〝熱病の発作であって、天才の発動ではない。〟明晰の精神が混屯の中に和合と光明を生じさせねばならない。あらゆる芸術において、創作者とは〝すべての人が自分と同様に感じたことを描く人〟である。十七世紀の人々もソフォクレスやアイスキュロスの「創作する弟子」として、アテネの演劇をフランスの舞台の上に甦らせたのだった。

もっとも高貴な勝利をえるためには、いたずらにウェルギリウスやホメロスの後塵を拝することなく、かれらの「すばらしい足跡」の印された道に、あえて「新しい足跡」を印さなければならない。

ああ、「小心な帆」に身を固め、これら巨匠の名のみを「北極星」として、ただこれに沿うて進むばかりが能ではない。敢然と遠洋を航行してはならないのか。古代の風俗習慣、学問は古代作家の詩文の中に生きている。かれらの世紀はかれらの高貴な書巻の中に納められている。だが〝われわれにとっては風俗、学問、習慣、一切が変った〟のだ。何を苦しんでわれわれは近くを見ずに、はるか遠くを見ながら過去に生きて、みずから考えもせず、他人の考えで書き、おのが眼の見もしなかった光景を敍さねばならないのか。

ホメロスの中には、生れたばかりの英雄的ギリシアの完全な姿があざやかに生きている。デモクリトス、プラトン、エピクロス、ターレスは、未開拓の自然の神秘をウェルギリウスに指し示した。そして今やトリチェリ、ニュートン、ケプラー、ガリレイが、より深い学識と力強い努力によって、「すべての新しいウェルギリウス」に宝庫の扉を開いたのだ。学問の領域が拡がれば、詩文の道もまた大きくなるのは必然だ。

ビュフォン（自然学者）の眼は大地の胸を開いて、数々の驚異をあばき、大洋を敝う暗雲をはらった。バイイ（天文学者）の筆は天界の変化を予示し、決定し、もろもろの彗星はカッシニ（天文学者）の法則に従い、今や磁石のみがわれわれの船舶の帆を導く。ウェルギリウスや聖なる盲人ホメロスが〝今日再び生れてきたならば、かれらの巧みな手がこうした豊かな富を捉えることを怠る〟であろうか。かれらの崇高な作品は、多彩な富で燦然と輝くであ

ろう。

さて、魂はいたるところにあり、思想は翼をもつ。さあ、飛び立とう。かれらのもとへ行って、手本を見つけよう。かれらの時代へ旅をしよう。そこでは各々の人が自由率直で、あえて一個の人間であり、堂々と思考しているのだ。そして、

Changeons en notre miel leurs plus antiques fleurs,
Pour peindre notre idée empruntons leurs couleurs;
Allumons nos flambeaux à leurs feux poétiques;
Sur des penser nouveaux faisons des vers antiques.

〔大意――かれらの古い花々をわれらの密に変えよう。われらの思想を描くためにかれらの色彩を借りよう。かれらの詩の焔でわれらの松明に火を点じよう。新しい思想で古い詩文を作ろう。〕

古代の神話伝説、あの「くだらぬ作り話」のみがミューズにふさわしくて、われわれの「学問的労作や学究的測定」は、ただ厳しくて見るもおぞましく、かれらの幻想ほどに壮麗ではないというのか。旧慣墨守の教説は日々このことをいう。だが自然が不朽の作の源泉、モデルであるならば、この宇宙全体、この永遠の秩序、この多様な運行、要するに〝広大な真理、自然そのもの〟(*L'immense vérité, la nature elle-même*) は、あの古代人が自然と名づけて、その機構を見事に整えた体系よりも、雄大ではないというのか。古代のもろもろの真理は、はるか遠くに退けられ、むずかしい言語の中に隠されて、民衆には知られていない。おお、ミューズよ、このこともまたわれわれを刺戟する材料ではないか。近代の「厳しい詩」は、すばらしい通詞として、これらの真理を引出す栄誉を担うで

あろう。そして「新しい美と新しい事物」が、拍手喝采をもって迎えられるであろう。「すべてが言われ、考えられてしまった」という歎きは不毛かつ無用である。近代の詩神は竪琴を手に、花の冠をつけて、フィンランドの森、バルチックの荒海へと、もっとも僻遠の地帯にまで無限の宝を求めて行くであろう。

若き詩人よ、精進せよ、敢然とこの赫々たる征服をなし遂げよ。もはや理屈はいらぬ、精進せよ。偉大な実例が証人なのだ。あの高名な巨匠達の詩文が、君の血をたぎらせ、君の髪を逆立たせるならば、また日々かれらの魂に鼓舞されて、〃あの創造の要求、あの熱狂、あの焔〃（*Ce besoin de créer, ces transports, cette flamme*）を身に感じるならば、精進せよ。あの「検閲者共」に、連中の知りたがらぬ「こうしたすべての新しい宝」（*tous ces trésors nouveaux*）を示してやるのは君の役目なのだ。

願わくば、われわれの中でも「創作の精神」がウェルギリウスやホメロスの高峰に達するように！　それにはかれらの足跡を追わずに、かれらの先例に倣い、慎重にかれらから遠ざかりながら、〃かれらがもしわれらの間に生きていたならば、かれら自身なすであろうこと〃（*Ce qu'eux-même ils feraient s'ils vivaient parmi nous*）をなし、そして自然のみが、その莫大な驚異によって、創作者の神話、神々となり、自然の法則がその神託となるように！　要するに〃神々の言葉でニュートンに語らせる〃（*En langage des Dieux fasse parler Newton*）ことだ。

けれども「フランス人の言葉」は、高邁な詩文学に適さぬといわれる。果してわれわれの言語は、永久に平身低頭して、文芸不振の責を負わさるべき運命にあるのか。フランス語の散文が重々しく退屈で、韻文に熱気や諧調が欠けていても、それは言語そのものの罪ではない。ル・ブラン、ラシーヌ、デプレオーを見よ。またルソー、ビュフォン、モンテスキューを見よ。言語はかれらに信従して、壮麗多彩な文となり、深い魂の機微をもさぐるではないか。言葉に反逆され、手に負えぬと歎くのは凡庸な作家のすることだ。〃真のデモンが迫り、燃えあがらせ、支配する人〃（*Celui qu'un vrai démon presse, enflamme, domine*）は、こうした苦しみを知らぬ。デモンに鼓吹された比

喩や言葉が、作家の脳裡をかけ廻り、あたかも生動する全宇宙のごとく、汲みつくせぬ壮大な泉となる。作家はそれを拾いあつめ、結び合せればよいのである。

セーヌの言葉は、トスカナやカスティリアの言葉に比して、いまだ頑固な多くの障害物に身を固め、巧者の手にしか従おうとしない。だがそれは禍ではなく、むしろ神々に感謝すべきことだ。われわれの言語そのものが、すべての卑俗な精神に、詩文学の聖廟を閉ざして、そしてそこへ参入しようと欲するならば、〝すべてを畏れることを知り、かつすべてを試みることを知らねばならぬ〟(*Il faut savoir tout craindre et savoir tout tenter*)と教えているのだ。〝頂上まで登るか、それとも泥の中を這いずり廻るか〟——いずれかを選ばなければならない。

*

以上、われわれはシェニエの詩学といわれる「創作」の内容を通覧したが、そこに述べられた趣旨そのものは、フランス流の詩学として特に目新しいものではない。クラシック派の主要テーマ「古代模倣」についての論も、ボワローの域をさして出でるものではない。創意工夫を強調しながら、ついで「真実、良識、理性」への背反を戒めるなど、シェニエの方法の限界を示しているとさえいえる。また有名な詩句の意味にしても、一見、新思想と古代尊重との折衷論とも受けとられ、ひいてはシェニエ自身の政治的立場をも想到させるであろう。

クラシック派に親しい「自然と真実」の概念についていえば、シェニエは確かにその意味内容を拡大している。またあのかまびすしい「神話」(*Merveilleux*)の問題についても、大いに自由な解釈をして、異教神話もキリスト教神話も認めず、近代科学の業績をもってこれに置きかえようとしている。けれどもこうした主張もまた、シェニエの時代としては別に驚くにあたらない。十八世紀の後半には、自然科学は一般的な流行であり、この種の問題については

〝近代派〟の人々、フォントネル、ラモット・ウダール、またデュ・ボスにつづいてディドロもマルモンテルもほとんど同様の意見をもっていたし、実作の上でも「くだらぬ作り話」の神話詩は、すでに科学詩に敗訴していたのである。さらに自国語の〝擁護と顕揚〟については、周知のように、十六世紀にデュ・ベレーが公然と表明したところである。――要するに、その趣旨からいえば、シェニエの唱える「創作的模倣」(*Imitation inventrice*) は、ラ・フォンテーヌにおける「独創的模倣」(*Imitation originale*) とほとんど選ぶところはないであろう。

さらにいえば、シェニエは特にフランス十八世紀の子として、科学文明の進歩を謳歌し、その獲得物の作品化を強調して、これを詩学の眼目にしているように思われる。けれどもこの問題については、もっと別な観点からも疑惑が生じるであろう。（人智の進歩と芸術の進歩との関係についての本質論は、今は措く。）

われわれにまず想い起されるのは、シェニエが好んで援用するビュフォンの所説である。ビュフォンは、これまた有名な〝文は人なり〟の語を含む――そして古典的散文の理論書といわれる『文章論*』の中で、作家の思想を彫り刻むべき style, *stilus* の原義を強調して述べている。

「よく書かれた作品のみが後世に伝わるであろう。知識の量、事実の特異性、発見の斬新さは、不滅性の確かな保証ではない。もしそれらを含む作品が、卑小な対象のみを取扱うならば、また作品が雅致もなく、高貴さもなく、天稟もなしに書かれたならば、作品は滅びるであろう。なぜなら、知識とか事実とか発見は容易に奪い取られ、運び去られ、さては、より巧者の手で使用されるに至る。これらのものは人間の外にある。文は人間そのものである。」

* Buffon, *Discours sur le style* (1753)

また、古来、〝教訓詩〟あるいは〝科学詩〟なるものが、科学思想と科学の産物を賞揚することに努めてきたが、

その努力はほとんど成功しなかったという事実がある。もっとも著名なウェルギリウスの『農事詩』にせよ、ルクレティウスの『物の本質について』にせよ、その文学的価値はそうした思想内容よりも、むしろ敍述、抒情あるいは敍事的要素にあるといわれる。――シェニエの野心的な哲学詩、科学詩への試みも、この種の疑惑を免れないであろう。かれは「聖なる盲人に導かれ、……ニュートンの炬火に照らされ、ルクレティウスとともに」長詩「ヘルメス」*Hermès* の制作に励んだというが、この詩篇がたとえ完成されていたとしても、果してファゲのいうように「全フランス文学史の上でもっとも美しい哲学詩*」となったであろうか。残されたその断片について見る限り、生彩を欠いているように思われる。新世界の発見を主題とした長詩「アメリカ」についても同様である。

* Emile Faguet, *André chénier*, Hachette, 1902, p. 136.

現今、科学文明の進歩は目覚ましい。古代はいうに及ばず、シェニエの時代とは比較にならぬ、すばらしい発展を遂げている。わけても巨大科学、宇宙科学あるいは生命科学の領野では、驚嘆すべき多くの成果があげられている。そしてこうした科学文明の呈示する景観は、詩人の想像力を刺戟し、その魂をゆさぶることも可能であろう。けれども、所詮、科学は「真理」を、芸術は「美」を追求するという根本原理によって、復讐されざるをえないであろう。

*

それでは、シェニエの唱える〝創作〟あるいはかれの詩学の〝独創性〟とは何か。――この問題を考えるためには、試論「文学の完成と退廃について」の方が、より適切な材料を提供しているように思われる。というのはこの試論には、詩篇「創作」と重複する箇所が多々見られるけれど、もともと「ヘルメス」の序詩にあてられた「創作」に

比して、ずっと自由にシェニエの文学観が述べられているからである。

コンスタンチノープル――〝ビザンスの中心〟に〝美しいギリシア人〟の母から生れたアンドレは、終生〝半ギリシア人〟としての固定観念に憑かれていた。そうしたシェニエにとって、古代ギリシアは精神の祖国――それも多分に美化すれ、理想化された観念の共和国であった。そしてそこへ回帰することは時間と空間と伝統を超えて、直接的に「生れたばかりのギリシア」の原始自然に親しみ、純粋な泉に汲み、同時にポリス的雰囲気と市民精神に浸透されることであった。

「古代人は赤裸であった、……かれらの魂は赤裸であった」とシェニエはいう。――古代の人間は、自然から絶対に遠ざかってしまった無数の恣意的な制度によって、慣らされ、加工されてはいなかったのだ。ところが、われわれ近代人は「幼時からわれわれの精神をむつきで包み、想像力を紐でつなぎ止め、……われわれの魂は半ズボンの中に閉込められている」のだ。美しい空の下、生の自然にかこまれた民族によって語られる「原初の言葉」は、何とすばらしいことか。とりわけギリシア人は地上のいかなる民族よりも文学芸術のために生れたもので、かれらのみが熱狂の中にあっても、つねに「自然と真実」に従うことができた。故に「原典を読むことは純粋な酒を飲む」ことである。

「原初古代人は創作していた。わが偉大な人々は改修しなければならなかった」とシェニエはいう。――前者は赤裸の自然を模写しさえすればよかったのだが、後者は苦労して奇妙な偽りの衣装の下から自然を掘り出さねばならなかった。前者はただ建立すればよかったのだが、後者は破壊することから始めなければならなかった。古代人は真実であるためには、各自が考え、感じることをそのまま言えばよかったのである。

古代の芸術家の鑿を導いたのは、形式的な約束事や盲目的な習慣や流派の仕来りなどでは決してない。かれらは自由率直な民族の眼と体験によって、また詩人的想像力で自己の天才を燃やし、「自然そのものの道に沿うて、自

然の指示する完全な美にまで到達した」のであった。労苦に疲れ、悪徳にまみれた近代の人々と異なり、かれらは直接的にこの原初の神性な形像を見出すことができたのだ。かれらは「神に似せて人間を作り」、かくも夥しい傑作を産んだのである。

「自然と真実」について、シェニエは特に「天真」(*Naïf, naïveté*)を賞揚する。——「真実から決して遠ざからぬ」というだけでは十分でない。力強く正確に真実でなければならぬ、すなわち「天真」でなければならぬ。ところで、これについては、多くの作家から秀れた意見が述べられたが、深く考えない人々は、この「天真」をただつまらぬ事をいう際の「無邪気な、ほとんど子供っぽい率直さ」の意に解しているようだ。とんでもない話だ。「天真はあらゆる芸術の、そしてあらゆる芸術における各様式の極致」なのだ。

美しい言葉の選択、快調な構文ができても、「天真」でなければ、決して人を感動させないであろう。音調は耳朶に消え、思想は魂に達しないであろう。「天真」のみが、われわれのうちに深い生々しい感動を喚び、われわれの眼に涙をあふれさせ、われわれの胸を引裂くのである。そして、

「ただ華やかで上品な画家、作家ならば、誰にでも模倣されるであろうが、〃天真〃である人は永久に模倣されえないのだ。〃天真〃はその人が自己のすべての思想、すべての表現に押す刻印であって、その作品をかれのものとし、他の人のものではありえなくするのである。」

ホメロスやウェルギリウスの傑作は、まさに「天真素朴な創作」(*Inventions naïves*)であった。(ここでまたわれわれはビュフォンの文言を想い起す。——シェニエにとって〃ナイヴテ〃は人間そのものである。)

さらにシェニエは古代的「市民・詩人」(*Poète citoyen*)として、文学者の社会的使命を強調する。——古代ギリシア、またローマの人々は政治的自由と民主的熱誠の中に生きていた。そして特に詩人哲人は誇り高き〃民の牧者〃であった。「天才と勇気の果実」である二つのものが、真の栄光に導く。すなわち「国事を支える偉大な行動

と国事を照らす秀れた著作」である。よき行為は人間を偉大にし、良書はそれ自身よき行為であり、賢明で高邁な作家は、しばしば道徳と思想における「健全な革命」の因となる。

詩人が生々とした描写によって、哲人が説得的な論議によって、自然の秘密と人間の権利と徳義の悦びを知らせる時、「文学は市民的であった。」文学はもっぱら法、祖国、平等、賞讃すべき一切のものへの愛と、不正不義、専制、邪悪な一切のものへの嫌忌を鼓吹していた。そして文学者は尊重されていたのだ。民衆は公共の仕事に励む人々を、才能によって同市民から抜きんじて、遠い将来の危険を監視する人々、また自己の研鑽と経験を公共の福祉にささげ、祖国に奉仕する人々を尊敬したのであった。

けれども人間の間に、才能の不平等以外の、忌わしい不平等がはびこり、専制政治が確立されると、作家は危険におびえ、報酬に心を奪われて、不正な権力に自己の精神と筆を売った。そして小数の権力者に手を貸して、民衆を傷つけ、欺き、競って屈従の範を示した時、「聖なる文学は堕落し、人類は裏切られた」のである。

ところで、「少年期をすぎた頃から周囲に眼を開いた」シェニエ自身はどうであったか。——

「文学がかくも平伏して、人類が頭をあげることを忘れているのを見て、憤慨したわたしは、しばしば激越な青春の悦楽と迷妄に身をゆだねた。だが、つねに詩と文学と勉学への愛に支配され、……友人達に支えられて、わたしは少なくとも心の中で、わたしの韻文や散文が、評価されると否とにかかわらず、いかなる卑劣さも汚さなかった少数の作品の中に列せられるであろうと感じていた。……そうして貧困のために独立を妨げられた時でさえ、つねにこうした考えに好んで耽りながら……立派な規律の復活するのを見たいという、おそらくバカげた希望について思いをめぐらしていたのだ。」

（そして歴史と事物の本質の中に探求したのが、この「文学の完成と退廃の原因と結果」であった。）

古代的市民・詩人をみずから気取り、シェニエは独立不羈を旨とした。自由を代価に富を求めず、王候大官に親

しまず、いかなる徒党結社にも組みせず、シェニエは思想の自由なきところには生きずに、ただ「理性を案内者とし、正義を師と仰ぎ、法を保護者とする」決意を固めて、可能なかぎり、ありのままの真理を求め、これを堂々と表明しようと誓う。

才能ある人々も宮廷に膝を屈し、顕門に媚びるならば、詩人天才の名に値しないのだ。詩壇の立法者ボワローは作家達に「ルイ十四世に似せて英雄を作ること」を勧告した。ヴォルテールは「恥ずべき臆病さ」でお偉方の寵愛を求め、それを子供のように得々として吹聴した。あわれな「つき合いたくない男」である。また人間と地上を愛するシェニエは「Homo sum（われは人間なり）こそ、あらゆる芸術の原理、目的、目標」と観じて、パスカルの『パンセ』でさえ「もっとも傲慢な調子で、もっとも仮借なき詭弁を支えるのに用いられた雄弁」にすぎないという。

*

以上、「文学の完成と退廃について」の論稿によって、シェニエの愛著する「原初主義」(*Primitivisme*)と「市民精神」(*Civisme*)を見てきたが、さらに古代的意味における〝天才〟*génie*の喚起をもつけ加えなければならない。(Génie, *genius*は人間の運命を司る神霊の意で、Démon, *daimôn*と同義であり、神性な天賦の才である。)

詩篇「創作」の中で、シェニエは作家を鼓舞し、燃えあがらせる「真のデモン」の働きについて述べていた。ルソー流にいえば〝火の魂〟(*Ame de feu*)のみが、このデモンの化身となり、崇高な行為を可能にするのだが、シェニエもまた同じ語を用いて文学制作について語る。なぜなら〝火の魂〟のみが感受性と想像力を燃やし、芸術創造の霊感と熱狂を喚び起すことができるからで、冷たい理知や巧みな技術では何ものも創造することができないのだ。シェ

ニエは、ある「悲歌」*Elégie* の断片で歌っている。

Souvent, lorsqu'aux transports mon âme s'abandonne,
L'harmonieux démon descend et m'environne,……
〔しばしば、わたしの魂が熱狂に身をゆだねる時、デモンが降りてきて、（黄金の翼で）わたしを包む……〕

また「雑集」*Varia* の中のエピローグにも次の詩句がある。

L'art des transports de l'âme est un faible interprète;
L'art ne fait que des vers; le cœur seul est poète.
〔芸（たくみ）は魂の熱狂の微力な通詞で、韻文を作るのみ。心情だけが詩人である。〕

概してシェニエの作品には、こうした〝霊感を与える神〟（*Génie inspirateur*）とか、詩人の〝守護神〟（*Génie tutélaire*）を喚起したり、天才人を讃美する箇所が多く見られる。そしてこのことは逆に凡庸卑俗なものへの痛烈な断罪となる。――詩篇「文学界」の草稿の中で、シェニエは「天才なき愚者」は芸術の恥辱であれと叫ぶ。凡庸卑俗な作家はただ「愚かな保護者」の腕の中にかくれ家を求め、同じく批評家は伝統と規則をふりかざして、あらゆる新作にケチをつける。すべて芸術の「妬み深い秘奥」に入れぬ連中なのである。

十八世紀も半ばをすぎると、実際、Goût（趣味、鑑識眼）の掟が天才の霊感を完全に封殺し、伝統的方法は文字通り〝模倣の模倣〟でしかなかった。そしてこの現象は古代ギリシアの末期において見られたものだ。

「諸世紀の後に、……マケドニア人の、ついでローマ人の奴隷となったギリシアは、もはやあの男性的な創造の精神を産まなくなった。考証博学が天才にとって替った。……ギリシア人はかれらの天才を失うや、瑣末な詭弁家にすぎなくなったのだ。」（「文学の完成と退廃について」）

シェニエは古代的天才の諸権利を要求した。ニーチェ流の用語でいえば、アポロ的精神とともに、ディオニュソス的精神の喚起を主張したのだ。そしてこうしたアンドレのすべての傾向資質は、一七八九年の革命の中で〝男性的な〟憤怒となって爆発するであろう。

*

われわれは古代模倣と〝創作〟との関連において、シェニエが強調したと思われる主要点――原初主義、市民精神、天才主義、加えてシェニエ個人の男性的資質を指摘した。そしてそこからシェニエにおける古代志向が、単にボワロー流の古代崇拝や、また十八世紀流の非フランス化あるいは非キリスト教化ではなく、一種独特の個性的な、野心的な探求であったことを想わずにいられない。

古代、人間は赤裸で、その魂は天真素朴であった。詩人はデモンの焔に燃えて創造し、同時に社会の木鐸をもってみずから任じていた。――シェニエにあって、こうした古代への回帰は、同時代の誰よりも直截的で、いわばルソーの自然復帰にも似た効力をもっていたのではないだろうか。かれが繰返し主張する〝創作〟〝斬新〟の意味もまたそこから引出されるように思われる。

Souvent des vieux auteurs j'envahis les richesses.
Plus souvent leurs écrits, aiguillons généreux,
M'embrasent de leur flamme et je *crée* avec eux.

〔大意――しばしばわたしは古い作家の富を侵す。かれらの作品は、わたしを刺戟し、その焔でわたしを燃え立たせ、わたしはかれらとともに創造する。〕

と、シェニエは「自作についての書簡詩」[1]の中で、Créer という語を用いている。そして実際この方式で〝創作〟を試み、牧歌調の「盲人」[2]や「タレントの乙女」[3]など、幾篇かの成功した作品を残している。

1) *Épître sur ses ouvrages.*
2) *L'Aveugle.*
3) *La jeune Tarentine.*

さらにシェニエの男性的な性格と青年の客気を想うならば、かれのこうした行き方が文学改革への強い意志と自信に支えられていたことも首肯される。詩篇「創作」の中で、かれは繰返し Oser（敢行する）Travailler（勉励する）などの語を用いて、若き詩人の奮起を促しているが、シェニエ自身も〝おお、われもし能うならば、いつの日か！〟と烈しい気負いを覗かせている。この詩篇に附せられた銘句 *"Audendum est"*（大胆であるべし）の意味も、おのずから理解されるであろう。

原始自然の讃美、天才、霊感、心情の復権、また詩人の社会的使命――などは、果して、あのポエジーに酔い、芸術の解放を叫んだロマン派の合言葉であった。シェニエとロマン派との関係については、種々意見のわかれるところ

であるが、シェニエの中にこうしたロマンティックな、革新的な諸要素を見出す評家は一人ならずいる。

ハンガリーのシェニエ研究家ハラスチは、シェニエにおける「反古代的思想」[1]を指摘して、これこそ詩篇「創作」をよく説明するものだといった。またルネ・カナはこの詩篇を「独創性と自由な霊感のための熱烈な弁護」[2]と看ており、ジャン・ファブル氏は同じ詩篇について、そこには「革命の合言葉が稲妻のように垣間見られ」、シェニエは「文学革命の成就を祈念している」[3]という。さらにヴァン・ティーゲムは、シェニエの「改革思想」を評価して、特にその抒情主義復活への功績について述べる。——

「もしかれの作品が革命の前夜に、公衆にでなくとも、文人達に知られていたならば、ロマン派の戦いの大部分は勝利を収めていたであろう。」[4]

1) Jules Haraszti, *La Poésie d'André Chénier*, Hachette, 1892, p. 44.
2) René Canat, *L'Hellénisme des Romantiques*, t. III, Didier, 1955, p. 213.
3) Jean Fabre, *André Chénier, l'Homme et l'oeuvre*, Hatier-Boivin, 1955, p. 136.
4) Philippe Van Tieghem, *Petite histoire des Grandes Doctrines littéraires en France*, Presses universitaires de France, 1957, p. 146.

一八一九年八月、シェニエの死後二十五年、アンリ・ド・ラツーシュによって初めて『全集』[1]が公刊されると、若い文学世代の間に大きな反響を呼んだ。ヴィクトル・ユゴーは「革命の斧がまだ血に染まって置かれている」[2]この未完の作品の中に、「それなくしては天才のない、そしておそらく天才そのものである深い感受性の印」を見た。ジュール・ルフェーヴルは、詩人の霊に感謝を捧げ「わたしは汝の焔に燃え、汝のすべての詩文の中にわたしの魂を見る」[3]と歌った。特にサント・ブーヴは、シェニエをロマン派の「先駆」または「長兄」として祭りあげた〝張本人〟であった。[4]かれの『ジョゼフ・ドロルムの生涯と詩と随想』によれば、ジョゼフは「精神も心情も、あのアンドレ・シェニ

エが断頭台の下から十九世紀に遺贈した若い詩派に属して」いて、もし自分が「あの恐しい日々」に生きていたならば〝従容として殉教者のごとく……詩人アンドレに続いて、聖なる断頭台にわが首級を差出したであろう！〟と叫ぶ。そしてもし運命の神の手の中で「いけにえ」の取替えが許されるならば、自分はアンドレの身代りにもなっただろうとさえいっている。その他ミュッセ、ゴーティエなど、文学革新の意気に燃える青年達は、こぞってシェニエを自派の旗印としてかかげ、あの有名な詩句――〝新しい思想で古い詩文を作ろう〟という一句をかれらの機関誌『ラ・ミューズ・フランセーズ』[5]創刊号の銘句として、また新しい詩作の〝綱領〟として採用した。さらに詩人の社会的使命については、いわゆる〝人道主義的ロマンティスム〟として、特に一八三〇年以後ラマルティーヌ、ユゴー、ヴィニーなどが「民の牧者」の役割を演じたことはよく知られている。

1) *Oeuvres complètes d'André de Chénier*, Paris, Baudouin frère; Foulon et compagnie.
2) *Le Conservateur littéraire*, No 1.
3) Jules Lefèvre, *Aux mânes d'André Chénier.*
4) *Vie, poésies et pensées de Joseph Delorme.*
5) *La Muse française* (1823—1824)

アンドレ・シェニエは〝創作〟を求めて〝模倣〟を断罪した。そしてその方法には、奇しくもルソーのそれと相通じるものがあるようだ。シェニエとルソー、もちろん両者には種々相異点が認められる。しかしそれにもかかわらずシェニエは〝半ギリシア人〟として、あの〝ジュネーヴ市民〟[1]ルソーと同様に、フランスの文化伝統にたいして自己を異質的存在として規定し、そして〝古代〟あるいは〝自然〟という、いわば絶対的な、根元的な理想を設定し、これに依拠して一切の権威伝統を否定する――という方式をとったといえないだろうか。果してそうならば、〝革命の魔神〟ジャン・ジャックほどではないが、アンドレの星の感応力もまた大きく、「健全な革命」の因となりえたのであ

ろう。いずれにせよ、「十九世紀のあらゆる詩人は、……アンドレ・シェニエの黄金の船に乗って、イオニア海を渡り、ホメロスやサッフォの歌声を聞くために出帆した[2]」のであって、〝シェニエはクラシックか、ロマンティックか〟という、あの騒々しい論争ほど「バカな喧嘩[3]」はない。

1) Jean-Jacques Rousseau, citoyen de Genève.

2) Arsène Houssaye, *Histoire du 41e fauteuil de l'Académie française*, 6e édit., Paris, 1861, p. 283.

3) Francis Scarfe, *André Chénier, his life and work*, Oxford, 1965, p. 125.

後記

* 本稿のために使用した主要テクストは次の諸版である。

—Henri de Latouche, *Poésies d'André Chénier*, Charpentier, 1840.

—Becq de Fouquières, *Oeuvres en prose d'André Chénier*, Charpentier, 1872.

—Gabriel de Chénier, *Oeuvres poétiques d'André de Chénier*, Lemerre, 3 vols, 1874.

—Paul Dimoff, *Oeuvres complètes d'André Chénier*, 3 vols, Delagrave, 1908—1912.

—————, *L'Invention*, Nizet, 1966.

—Gérard Walter, *Oeuvres Complètes d'André Chénier*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1950.

なお、本稿では煩瑣をさけるため原語表記をなるべく省略した。